

北社会ニュース 第24号

2006-6-19

発行者：鈴木壮夫

会員の皆さん、キーを叩いている今は6月18日、午後8時20分です。父の日というよりも上杉山小時代の初恋の人の誕生日、ミッチャンも66才になってしまったかと感慨に耽り、1時間半後に始まるクロアチア戦の前にこの北社会ニュースを書き上げてしまいたいとビールを呑み続けております。クロアチア、我が家の昭和43年の高等地図帳ではまだユーゴスラビアの一地方です。北緯46°位だから日本でいえば北海道の北、宗谷海峡にあたります。三歳の孫が遊びに来て「ジイジ、何してんの？」と膝を叩いて去っていく。今朝は3時半起床、4時半よりソバを打ってお客さまは多くはなかったが、長時間の立ち仕事、疲労が少々身体にしみ込んでいる。クロアチアに3-0以上で勝てるだろうか、頑張っ欲しい。と応援しながら！

(1) 本日、第243回北社会

本日は青山先輩のご尽力により、外務省特命全権大使（関西担当）天江喜七郎氏に上京いただき「昨今の外交について思うこと」と題し、ご講演いただきます。

先月、お手紙を差し上げ「身勝手に、わがままな国民に言いたいこと山ほどあるでしょう。当日はどうぞ遠慮なく存分に主張して下さい。お待ちしております」と書きました。天江さんのご返事は「肩の凝らない講演に致したく存じます」と率直さがにじんでおりました。お兄さんの新六郎氏は私と同期の11回生です。先月、仙台で開催された北陵ピンピンの前夜祭で久しぶりに再会、話も弾みました。叔父さんの富弥さんと私の父は民芸運動の仲間でした。喜七郎氏とは本日初対面ですが、そう思えない縁を感じております。「外交」について、会員の皆さんも様々なご意見をお持ちでしょう。課題は山積していると思います。「肩を凝らせず」しかし真摯に講演を拝聴して下さい。以下は私事です。

（ホランの会のモンゴル訪問に妻と参加、来週月曜日26日はウランバートルの日本大使館へ、市橋大使を表敬訪問し、10日間草原を旅してきます。）

(2) 来月以降の北社会講演予定

7月19日（水）和賀井敏夫氏（中42回）学士院賞ご受賞記念会

7月3日、天皇后陛下ご臨席の授賞式の模様をスライドを用いての記念講演を青山先輩のご尽力でお願いしました。

8月16日（水）桜井良之助氏（高11回）東京都都議会議員

「2016年オリンピック招致」

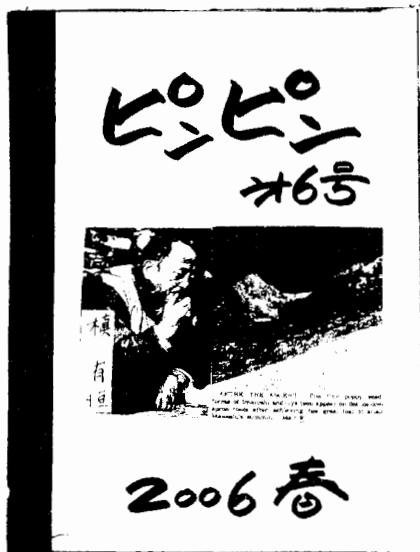
9月21日（木）渋谷正史氏（高15回）東京大学医科学研究所・教授

日本癌学会「吉田富三賞」ご受賞記念

10月 休会 18日（水）東京同窓会（ホテルオークラ）にご参加下さい。

尚、菊地勝夫先輩（高7回）のご尽力にて村井宮城県知事殿も北社会での講演を前向きに対応いただいております。楽しみにして下さい。

(3) 高11回・同期情報紙「ピンピン 第6号」発行



還暦を新たなる旅立ちと理解し、同期生同志のより強大な連帯感を祈念して、「ピンピン」を生みだして6年、部数は年を経る毎に増加、今年は150部発行した。寄稿者数は創刊号から11-15-23-26-29-36人と少しずつだが増えている。東京地区主体から地元仙台の同期生に浸透し始めており、「この程度の駄文ならオレも書ける」という声も大きくなってきた。2009年、第9号を発行する時、11回期生は卒業50周年を迎える。手作りではなく、ちゃんとした書籍にして母校の図書館に置いていただきたいと思っているし、その費用を捻出するため、仙台の本屋に積んだら、必ず売り切れると妄想を抱く者も出始めた。

今年は一高に入学してちょうど「50年」、応援練習に明け暮れていた5月9日、楨先輩が率いるマナスル登山隊が初登頂に成功した。そのことを思い出し表紙にさせていただいた。製本作業中、M君から面白い話を聞いた。M君の母は1908年生れ、生家は当時、野村証券の前身と張り合っており、津田塾大を卒業、英語に堪能だった。マナスル登頂を掲載した河北新報を見ながら母はM君に言った。「もう25年以上も昔のことだけど、楨さんにプロポーズされたんだけど断ったの」「仙台出身とは聞いていたけど、一高でオマエの先輩とは知らなかった」父が敗戦後、公職追放され、たまたま知人から仙台を紹介され縁も縁も（えんもゆかりも）ない土地に東京から引っ越してきた。事実は小説より奇なり、そのもの。製本作業をしていたもう一人のM君が言った。「なんでもう少し詳しくお母さんに聞かなかったのか、楨さんだって母校で講演した時、自分をフッた女の息子が聞いているとは夢にも思わなかった筈。ピンピンの記事にしたら面白かったのに。まあ・オマエはどっちに転んでも名字はMだったのか」製本作業の疲れを癒す逸話でした。

(4) 推薦図書 浅野史郎著 「疾走12年 アサノ知事の改革白書」 岩波書店

慶応大学総合政策学部の教授就任に際し、岩波書店の編集者より、「教科書は必要ではないですか」との言葉が執筆のキッカケとあとがきに書いている。私は仙台を出てから40年近くになる。仙台のことも宮城県のこともほとんど何も知っていないということ、浅野氏の率直さ、ひとりひとりが主役と県民に訴えつづけたこと、の三点が読後の感想です。北社会の中でも彼を嫌って、「講師には呼ぶな！」という声も大きい。その発端となった高校共学については一切触れていない。全国レベルの話題ではないのだ。

上記「ピンピン第6号」に県庁幹部だったI君が「後始末屋稼業」という気骨ある文章を寄稿している。浅野氏が一躍マスコミの寵児となった「官官接待」問題、I君は東京事務所長だった。他県からは余計なことをするなと撃墜をかい、各官庁では「物売りと宮城県はお断わり」と揶揄されるほど関係は冷却。而も接待名簿がほとんど架空。組織的不祥事と定着。知事は取材に堂々と自説を展開するが、I君はお詫びに終始したと書いている。